NPO 法人がんと共に生きる会では、設立 25 周年記念公開講座『がん患者にできること　Past, Present, Future』」を開催しました。以下に、事業のご報告を致します。

【概要】

この事業は、がん対策基本法の成立以降、患者の声が制度や医療の質向上に寄与してきた歩みを振り返りつつ、情報過多や医療の高度化により新たな形で生じている“がん難民”の課題に向き合うとともに、患者・市民が孤立せず社会に参画するための手がかりの提供を目的に実施しました。

当会が、ドラッグラグ解消等が目的のアドボカシー活動に起点を置いた設立から 25 周年を迎え、その節目として開催したのがこの公開講座です。

ここでは、患者・家族、医療者、報道、支援団体など多様な立場が一堂に会し、“患者にできること”の学びと対話を通じて時代への“思いのバトン”をつなぐ場とすることを企図しました。

【内容】

公開講座は現地会場(TKP 東京駅カンファランスセンター)と Zoom 配信のハイブリッド形式で実施し、午前・午後の部に計 256 名の参加者がありました。

午前の部[Past]では、がん患者の経験が政策や制度に反映されてきた歴史を振り返り、当会の活動を取材したメディア資料も活用しながら、患者の声が社会を動かしてきた具体的過程を共有しました。



午後の部[Present, Future]では、医療情報の受け止め方、患者アドボカシー、患者会活動、メディアの媒介機能といった現代的課題をテーマに講演とディスカッションを行い、来場者も交えた質疑・意見交換の時間も重視しました。



参加者の事前アンケートではがん医療・政策への関心や行動意向を、終了後アンケートでは講演理解度（3 件法）および自由記述を収集し、事業効果を把握しました。

【成果、今後の展望】

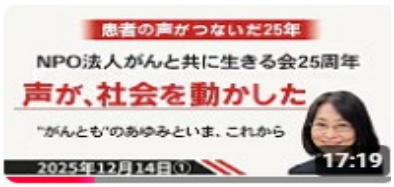
事前アンケートでは、がん医療・政策に関心を有する参加者は半数強にとどまり、
「関心はあるが行動の仕方が分からない」という声が多く見られました。

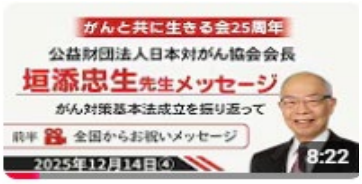
一方、事後アンケートでは各講演において 75%を超える高い理解度が示され、自由記述からは「パブリックコメントへの参加を考えたい」「情報を選び取る意識が高まった」、更に「SNS での発信も一つの参画方法だと分かった」（60%）など、具体的な行動意向の明確化が確認されました。

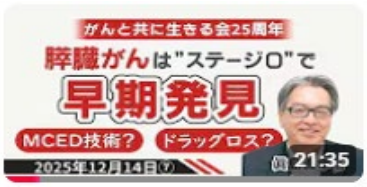
特に、医師ら登壇者が診療や意思決定に伴う葛藤を率直に語り、来場患者の切実な問いに誠実に応答する姿勢に対し、共感と信頼を示す声が多く寄せられたことは、ナラティブ（経験）とエビデンス（制度・情報）を両立させた対話が、“特別な人の特別な行動でなくても良い”と PPI への心理的障壁を下げることを示せました。

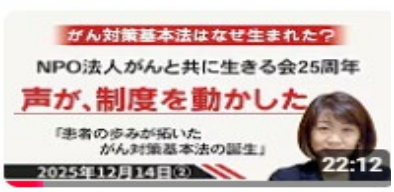
本事業で得られた知見を整理し、26 年 2 月以降、複数の学会・セミナー発表としても発信する予定です。今後は、こうした対話と検証を継続的に行い、患者・市民の声を社会に媒介するハブとしての役割を努めることで、実効性ある患者・市民参画と、より質の高いがん医療・がん対策の推進に寄与していければと考えています。
参加者や講師の方々、ご協力を下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

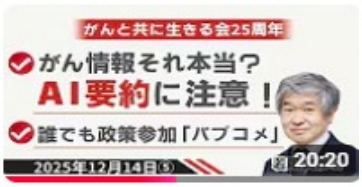


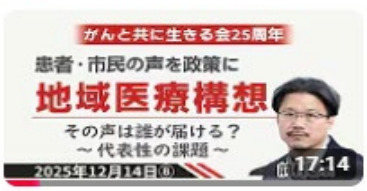




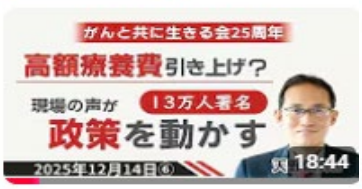














※本講座採録は、YouTube NPO 法人がんと共に生きる会チャンネルにて公開しています。
（全 9 動画）